

蠅螂の斧 とうろうのおの

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第八回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

誰かのたてた命題に添って、精緻化するばかりの専門家集団。様々な議論がなされるが、そもそもの前提は不問に伏される。そこは手に負えないから議論の対象にしない。こんな科学が信頼できるものだろうか。素人目には「おかしいなあ…」と見えていたはずだ。

人通りもまばらな僻地に、誰が利用するのかも分からないようなりつばな建造物が次々に建つ。年金のずさんな管理が明らかになる頃、あちこちにリゾート法とやらで、立派な施設をぼんぼん建てて、とても採算のとれない浮ついたブームに踊っている頃、そこに従事する人は感じていたはずだ。その家族もまた、おかしいなあと思っていた人はあったはずだ。それまでだって、たくさんの事業や、世の中の動きに、「我々のやっていることはどうもおかしい・・・」と渦中に従事する人たちは思っていたにちがいない。

今、児童虐待対策に従事する人はそう思っていないのだろうか？二十四時間繋がった呼び出し電話を持たされた配偶者を、家族はおかしいと思わないのだろうか？救急隊ではない、消防隊員でもない、児童相談機関職員なのである。

「店は24時間あいている方が便利だ」、なんていうちょっとした欲望に応えるために、働く者の負担はどうなっていくか。それによって崩された人の暮らしはどのようなものか。想像力を働かせなければいけない。過剰な便利には警告を発しなければならない。そして負担を背負うつもりのない、他者責任の追及には眉唾を持って対応しなければならない。

時々、そもそもの前提が間違ったところで、屋上屋を重ねてきているのではないかと思うことがある。個々人の人柄や才能の問題ではなく、前提に誤謬があったのだから、そこから始まる営みはどう創意工夫を重ねても、基本的誤りをカバーは出来ない。「所詮人間とは愚かしい、そういう生き物なのさ！」などと、斜に構えたくないでそこを問題にしたい。

それは、「児童虐待」通報件数5万件超えとその後の、次々の事件報道が目にも余るからである。対策は、必ず結果の出るときが来て、それを踏まえた総括が行われなければならない。例えば、交通事故死が1万人を超えた時代と比較すると、5000人余りになった時代は、最悪の時期からすると半減したと語られるべきモノだ。しかし「戦争では3万人が死んだが、平和になって戦死者はゼロになった」、この話と交通事故は同じにはならない。ゼロを目指せと言うなら、車を一切やめようという提案しかない。

事故死などあってはならないし、戦争もしてはならない。児童だろうと高齢者だろうと、虐待など許されることではない。それはそうだろう。だからなんだ？そこからではないか。責任のある語りを開始されなければならないのは。

児童相談所の見え方が、時代と共にこんなに変わってしまうとは思わなかった。児童虐待問題にちゃんと対応することを、国民の多くが、こんなに期待しているフリをするなんて信じられなかった。

私は今、渦中にいるわけではないので、それ以外の業務の現状を詳しく承知しているわけではない。でも児相OBとして、他の仕事もいろいろしていることは知っている。しかし、多くの国民はそこしか知らされないし、他の子育て相談など持ち込むところだとは思っていない。専門性の高い課題対応をするということで、市町村の児童相談機関のとの棲み分けを提言してきたのだと思うが、実態は、児相職

員のキャリアの方が浅いなんて事態があちこちに見られる。

国は該当者が多いことのアピールのために通報数の発表をするが、5万件の通報があつて仮に死亡事例が50件なら、0.1%の発生率だ。これが人間社会の現象として更に、どれくらいのエネルギーとコストをかけてゼロ%になるよう、努力されなければならない課題かどうか？考えてみよう。一つの死について、よってたかって非難したり、嘆いたりする理由は何なのか？

私にはこう見えている。児童虐待は特にそうだが、加害者は自動的に明らかになる。迷宮入りの凶悪犯罪ということにはならない。警察の捜査能力の劣化が言われて久しい凶悪犯罪。そんな中で虐待問題は、因果が早期に誰の目にも明らかになる。こういう出来事に人は弱い。関心を持ったとたん、その当事者と因果が提示される。水戸黄門の事件解決並みの早さで、関心持続時間内に白黒がつく。こういう事件が傍観者は好きなのだ。

そんなメカニズムを煽って書き散らすマスコミも、それで売り出す学者も、あおられて対策を講じる役所（児童相談所を含む行政）も、やらせメール問題で批判されて臆面もないアンフェアな始末書を書いてあきらめられた九州電力と変わらない。何かあったとたんに、「いじめはなかった」と記者会見してしまう学校長ともかわりないのではないか。

ふざけてはいけぬ。真面目そうな顔をしているからと言って、誠実だなんて、ちっとも言えない。臆面もなく、よくそんなことが言っていられるなあと思うようなことの連発する世の中で、児童福祉の理念に基づいて、子どもの権利を考えるなら、遠く長い道のりでも、子ども虐待の「予防と防止」に取り組まなければ、結局マッチポンプだろう。

酷い親が居るのは酷い世の中だからだ。そんな世の中でも、ちゃんとした親もいるなんて気休めにもならない。当たり前だ。同じ放射能を浴びても、発症は同じ時期ではない。弱い人、事情を抱えた人、体力のない人の所から被害は始まる。

それを個々人の問題だと語る鈍感が作り上げた、緊急援助デザインである。児童虐待の現状への対策などもうこれで良い。それより、今後の児童虐待の発生予防のために、今しておかなければならないことを実行する。そこしかないのは当然ではないか。

それをいったい誰が担当しているのか？私にはよく見えない。

1990年8月

8/1 WED 高校野球の開会式のため一週
操り上げてABCパノラマ大放送に大阪
へ。その後、篠原が友人と二十年近く続
いている現代画廊での三人展に。中西、吉田
両君と四方山話。肝心の篠原はPLの花火
大会に行っていたようだ。

そうか、この頃、月に一度大阪ABC朝日
放送ラジオに出かけて、桂南光さんの番組
に出演していたのだった。私のような仕事
をしている立場も含めて、世の中のいろん
な事について、求められた時にコメントし
ていた。あまり大した話が出来たと思わな

かったが、夕陽のみえるタワー上のスタジ
オはなかなか気分が良かった。いろんなゲ
ストにお目にかかれたのも楽しいことだっ
た。

8/4-6 SAT・SUN・MON トレーナーを引き
受けている「家族療法ワークショップ° STEP
II」。STEP I の経験者を中心に、全国から24
人の方達が集まってこられた。例によって、か
なり盛り沢山のプログラム。しかし最近時々疲
れたなあと思うようになった。これは僕には良
いことだろう。

延々と今も続いている家族療法訓練 step
1, 2, 3。受講生の変動が時代が合わせ鏡のよ
うに見える。2012年、受講生に児童相
談所勤務の人の公費出張受講が激増した。
国からおりてくる予算で研修が認められる

とか聞いた。でも、予算に連動してしまう学びの動機付けて、金の切れ目が縁の切れ目になりがちだと、受講生は分かっているだろうか？ こういう時代の流れそのものに批判的でないと、いつでも時代に流されているだけの職員になる。

8/7 TUE 小さな用件ながら気分のえらいことばかりのコンタクトを一日中つづけた。そんな中で後からほっとできるのは、やはり子どもと直接のやり取りである。夜は今日 FAX で受けて、明朝速達で返送する「住友金属社内誌・すみとぴあ」の原稿を 6 枚描いた。

こういう書き方では、まったく思い出せない。課長業務で、トラブルのやりとりだったのだろう。さてどんな話だったのやら、気になるなあ。

住友金属の社内誌連載は、この時点でもう 10 年以上になっていたと思う。この後、鉄鋼の大不況で、合理化の中、社内誌の発行は中止となり、連載もなくなった。

その後、中国の鉄鋼需要拡大で業界は、息を吹き返したと聞くが、ホント、景気は水物だ。大企業の社内誌と二十年以上の付き合いだったが、この間、世界の景気動向に揺れる日本のトップ企業内部を見聞できた。国内の各工場や高炉の火入れ式にも出かけた。公務員をしながら、漫画家の立場で面白い体験を重ねていた。

8/9 THU 北海道の体験実習。結局は行かないことに決めたというので、フェリーのチケット・キャンセルを自分でさせるために生協旅行部へ連れていった。チャンスは掴むも選択、見送るも選択。回ってこなかったのではないことを本人が知ったことも財産のうちだ。体験実習の断わりと詫びを、芽室の H 田さんに伝えた。まことに残念。

今思い返しても、残念至極だった。代わりに私が一週間の北海道の牧場体験なんか、行ってみたくらいだった。

8/11・12 SAT・SUN 今日から 15 日まで夏休み。とは言うものの、一気に片付けた雑用数件と D.A.N.通信 10 号の制作を二日間で済まさなければならない

DAN 通信は長年出し続けた個人ミニコミ誌。ファンも多く、これについて書いてくださいと言われて、「メイキング/DAN 通信」を産経新聞の夕刊に連載したこともある。近年はみんながやっているブログを、手間を厭わず、郵送版で数年間も続けていたことになる。

コピーして折り曲げて、シールを貼って、切手と住所を張って投函する。ものすごい手間を月刊ペースでやっていた。毎月、年賀状を出す感覚だったといえば、分かってもらえるかな。

8/13-14 MON・TUE 一家揃って琵琶湖の北、余呉湖野外活動センターのバンガローに出かけた。我家は車を持たないので、JR を乗り継いで木之本駅からはタクシー。

最近こんな動き方をする家族はほとんどいない。みんなオート・キャンプの道具をどっさり積み込んだ 4WD で乗り込んできている。我家もすき焼きを作ったり花火をしたり、泳いだりいろいろだが、僕は木陰で原稿を読んでいた。

夜は息子達と花札賭博をやった。賭率 1 対 10 のハンデを付けて本気でやった。賭事をする性格が出るというが、息子達が劣勢の時に自分の陥ってしまう人前での態度を知っておくのはとても良いことだと思っている。ただ問題は、むしりとってや

るつもりが、2500円ばかりとられたことだ。なあと親父はこうして小遣いをばらまいているのさ。

頑なに我家に車は導入しなかった。現在、息子達の世代は、大学時代に免許も取って、それぞれ運転している。妻もそのうち教習所に通って運転するようになった。私だけが相変わらず無免許だ。

車社会に反対とかいうのもでは全くない。移動手段に関心がないのと、運転している時間が無駄に思えて仕方ないだけだ。

過去に一年だけHONDA CB50という原付に乗ったが、走っている間中ずっと、到着時間のことばかり考えていた。道中が面倒なのである。運転は誰かに任せて読書したり、車窓を眺めたり、お茶を飲んだりが向いている。

8/17 FRI 児童相談所業務検討会議。福知山児相のキャンプ事業の実態について、かなり厳しいことを言う結果になった。正しく伝わることを願うしかない。

終了後、本庁から担当者が来て、①「精神薄弱児・者福祉対策基礎調査」②重症心身障害者通所援護事業実施要綱(案)③家庭養育支援事業実施要綱(案)の説明を聞いた。

(1)など10年以上前、各種団体からの反対があつて潰れた経過のある実態調査と同じようなものだが、今回、話はあるという。何が変わったのだろうか。

今もそうだが、こういう文言に拒否感がある。思いつきの臭いは大きく、漢字が多い。そして多分、数年ですっかり様変わりしている。そんなものに付き合いたくない。

「継続は力なり」、を強く信じて何十年、

先ずこれ自体が相当な継続だ。友人関係も、業務も、自分の行為も、続くものしか信用しない。そこに留まって踏ん張っていれば誰でも、相当な成果は手にすることが出来る。

しかしそれにしても、役所仕事って、今も漢字いっぱいの新規事業を繰り返しているのだが、その割に成果は見えていない。せいぜい、自殺対策をGKB47と称したことを、寄つてたかつて批判する程度のことである。なぜ、続きもしないことを提案した者や、予算執行した者を批判しないのかな。金と時間の無駄遣い。

家庭内だったら夫婦紛争ものだ。

8/18 SAT 家裁からのケースの月一度の家族面接(三回目)をした後、原稿を書いていた。夜は里帰りしている妹と子供たち(甥と姪)、うちの家族と祖父母の計10人で食事に行った。孫五人がワイワイとやかましい祖父母の幸せ。

夜中、VTR「セックスと嘘とビデオテープ」をみた。繋がりによるドラマの通俗性ではなく、繋がれないことによるドラマの喪失をドラマにしている、と書いていて何を書いているのか自分でもわからん。

なんだか、全般に夏休み期間中の感じが漂う日誌だ。この時代から二十年経つと、私に孫が二人いて、祖父母とは我々のことになっている。世代交代が順調に出来ていることを嬉しく思う。

8/19 SUN 日曜日だが相談所に出た。他に日がなかったので児童相談所問題研修の現地実行委員会をひらいたのだ。9人集まってくれてプログラムは大方まとまった。夜中、ヒッチコックの「めまい」をみた。タイトルを覚えていなかっただけ

で、見たことのある作品だった。僕はヒットcockをあまりいいと思って観たことがない。

児相研セミナーは当時、「児童相談所問題研究セミナー」と称した。今は「児童相談研究セミナー」。時代の流れから言えば、今こそ、児童相談所問題を語らなければならないのではないのか。この時代、さんざん、あれこれの開催や主催をやったので、今はもう絶対に引き受けない。

この「めまい」をテーマの文章に描いたイラスト(中日新聞)が今号の表紙である。

8/20 MON 丹後・野田川町教育研究会へ話に行った。講演が二本立てで、一部が僕、二部は「父よ母よ」「妻たちの思秋期」の斎藤茂男さんだった。著作のほとんど全部を読んでいるジャーナリストである。終了後、京都までの帰路同行した。いろいろなことが話せて楽しかった。

この夏、最大の思い出である。愛読書が多い斎藤茂男さんと、グリーン車に二人で京都駅までご一緒することになった。

講演はどうしてもよかったが、帰路の京都までの車中、たっぷり時間があつた。いろいろ聞きたいと思っていた。しかし実際は、新聞記者である氏に質問されるまま、私があれこれ喋ってしまった。その結果、誠に残念な結果に終わった。私の話すことなど、私は既に知っていることだったのに。

8/21 TUE 琵琶湖一周サイクリング隊の出発を見送った。今回の隊長は川畑君。登校拒否の男の子3人とスタッフ5人、小編成である。我々はこの取組を「必要な子供に、必要な事を」の精神でずっと大切にしてきた。一人だけを連れて一周したこともある。JTB や赤い風船ではな

い。何人揃わなければなどというものではない。一人一人を大切にすることの積み重ねがこの種の療育事業である。

そして夜は労演「風が吹くとき」。アニメが有名で、そちらを見たことがあるが、芝居の方がダンゼン良かった。夫婦のいたわりあいや愛情、そこに浸みだしてくる核の恐怖が本当に恐ろしかった。

このマガジン四、五号でマンガを掲載した琵琶湖一周サイクリングを春と夏に、繰り返し実施していた。当然そこに成果を感じていたからで、ここにも継続の力を見つけていた。

「風が吹くとき」、まさかこんな現実が我々の世界に登場することになるとは思わなかった。想像力の世界を上書きする現実とは・・・と恐ろしい思いがする。想像では恐怖を描けるのに、現実となると、恐ろしすぎて、何でもないことのように言いたくなる人の心情を悲しく思う。自分たちはどうなってしまふのだろう・・・と不安な気持ちが、大したことではないと合唱したがっている。この心情は女性より男性に強い? 「現実問題として原発が止まってしまったら、我が町はやってゆけない!」と発言する原発城下町の人々に、フクシマはどのように見えているのだろう。

8/22 WED 京都府青少年課の開催する「青少年地域育成フォーラム」なるものが開かれて、出席した。有識者の専門委員会でもとめたプランが冊子になっていて、その説明を聞かされた。しかし後半は参加者である、各市町村の人達の府行政への要望や、独断的な意見の垂れ流しだった。こういう会議は内容よりも形式が間違っている感じがしてならない。

誰が本気なのかまったく分からない会議

やフォーラムを延々と続けてきた結果、大阪市の橋下徹市長の誕生を引き出したのではないのか？

分かっているはずの人が、鈍感を装い、自分が責任を取らないで、先送りを選択する。その順送りで今に至った結果がこれだ。

8/23 THU 府が市町村の福祉担当職員を集めて行う説明会のプログラムのにぎやかで、90分程話した。ずっと高齢者対策事業の説明で埋まっている間に、全く毛色の違うシステム論の話は、出席者にどう聞こえただろう。一日目の最後のプログラムだったが、寝ている人はなかった。

組織内では希なことだった記憶があるが、私の考える本論に近い趣旨で話す時間を留意された。たしか二条城そばの会議場だった。京都府の中にも私のファンは居てくれたが、同輩か後輩がほとんどだった。これは私の弱点だったのだろうか？

8/24 FRI 隣接する府関係庁舎との積年の問題を解決すべく、会議がもたれている。手順が誤っていたり、経過の理解がいい加減だったり、困ったことは多いのだが、要はやれるときにやれる者が被ることだ。

経過を振り返ると、具体的な問題を、理解しがたい決着で矛をおさめてきたことが一番の問題なのだ。二度と同じ議論に引張り出されないためにも、最後まで見届けねば。

この庁舎問題はここで決着を見たのだと思う。わが方の組織内には、経過を考えるとその決着は不当だ！という声もあった。しかし、誰も経過を引き継がないような変則的な約束は、問題再燃の種になる。

分かりやすい決着にしておくことが紛争再発予防策にもなる。

そして二十年、今、ここに児童相談所はない。京都市内の観光名所・清水寺のそばに移動してしまった。またしても担当地域外（京都市内は、京都市児相の管轄）に設置された児童相談所だが、どうしてこういう事になるのかなあと思った。

宇治児相新築の時、設置場所から、庁舎設計まで、みんなで侃々諤々できた時代は懐かしいだけになったのか。

8/25 SAT 岡山大学教育学部で開催された第7回日本アドラー心理学会に野田俊作さんに招かれて、「夫婦関係におけるユーモア」なる演題で話をした。メインテーマが「夫婦」ということで、こんなタイトルにしたのだが、普段話すのとはちょっと違った準備をして、やるほうとしては楽しかった。誰かに「お題」を頂戴してというのは、大喜利みたいで面白い。

アドラー心理学は強力な野田俊作シンパによって支えられている感じがする。最近、目にする機会が減ったようにも思うが。

私はなにかにつけて、余り心動くことが少ない方だが、初めて野田氏の講演を聴いた時はたまげた。川畑君が事例を用意していたのだが、最初の数フレーズを述べただけで、あとは講師の独演会になった。

学会誌のリレーインタビューをお願いして、新大阪のオフィスにもおじゃましたことがあった。当日そこにいた人たちも同席しての、公開インタビューになったのに驚いた。オープンカウンセリングをやっている人たちには馴染みの形式だったのだろう。

8/27 MON 午前中いっぱいM判定員のケースにいろいろコメントをしていた。体の問題と心の問題、どちらか一方というものではない事実。着手できるところはいつも限られるし、手段も限られる現実の中で、心理診断とは何かというテーマが続く。「何であるか」と「何ができるか」、担当者の関心の在り方によってデータはいろいろな顔を見せる。

午後は半休をとって、ミネルヴァ本の編集会議(第五回)に宇治児相へいった。21時ごろまで、ディスカッションの録音をしたり企画を詰めたりしていた。

児相、そしてその後の知更相と、このころの新人や、力量に問題を感じている心理職のために、家庭教師のようなミーティングをよくしていた。

一緒に学べた世代や後輩はいいのだが、そこに遅れてきた部下、後輩世代には、組織的に学習機会が貧弱になってきていたのだと思う。自分で学べというのはいないが、独学の成果と共同関係の中の学習は結果が違う。一緒に学ぶ場を確保するのは、学習内容のためだけではない。それがチームワークや、次世代育成の組織のレパートリーに繋がる。難しいことではあるが、ここは肝だ。

学び損ねた先輩女性心理職にも多大な応援をしたが、余り受け止めてもらえてはいなかった。その点後輩は、多かれ少なかれ、おこなったことを受けとめて成長していつてくれた。分かってもらうのに随分時間のかかった人もあったが、それでもそのことを忘れず、ずっと後になってフィードバックをくれている事実には報われた気はする。

結局、北風ではなく太陽になることなのだろう。

8/28 TUE 朝、大山崎中学校の校内研修会に出かけた。夏休み中、多くの学校がこういう企画を実施している。会場を校外の公民館などに設定して、クーラーのきいた会場でというわけだ。川畑君と二人でこの夏はいくつか出向いた。担当地域の学校にはできるだけ、こういう形でも出ていきたいと思っている。

午後は家族療法のSVの来る日で、夫婦面接のライブを見てもらった。夕方からは観察室で、家庭内暴力ケースをみた。耐えかねて家を出たという話が悲愴感なく語られる不可思議さにしっかり見定めなければならぬものを感じる。

地域、学校との連携、教育分野の人たちへの支援、そんなことを殊更ネーミングせずに、心理職スタッフを中心に実行していた。そして家族を理解し支えることが児童相談所の中核的業務にあると確信していた。「家族療法」を特定症状のための治療技法だと認識したことはなく、児童相談全ての分野に応用できる援助だと考えていた。そして年度レポートにも、そのスタンスで量的な報告も続けていた。

8/31 Hと面接。相互なぐりがき法で物語を少し長めに実施し始めた。製作過程で考えておくようにと指示してあるので、すこしアイデア的なものができた。面白かった。

さあ、これは誰のことだったのだろう。多くはないがやはり、記憶の棚から完全に抜け落ちてしまっているものがある。残念だが、自覚しているより、もっと多くの欠落が生まれているに違いない。仕方あるまい。みんな覚えていたいなんて欲張りか。